
あいつは誰だ。俺はお前だ

kakio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつは誰だ。俺はお前だ

【Nコード】

N2844F

【作者名】

kakio

【あらすじ】

手を伸ばした。触れたのは他の誰でもなく自分自身だった。

000

「もしもし」

「……」。3秒ほどで切れる。間髪いれずに着信からリダイヤル。

「もしもし」「……」。またもや3秒ほどで切れる。吐息から中年の男らしい事がわかる。

おっさん、間違い電話なら謝るのが筋だろうがと思っているところで携帯が鳴る。

「……」。無言。頭にきたと言うわけだ。上等だ。リダイヤル。

「もしもし」「……」。3秒。切断。間髪いれずにリダイヤル。

「もしもし」「……」。3秒。切断。間髪いれずにリダイヤル。

10回程こんな応酬を続けた挙句、バカらしくなってこちらが降りる。

おっさん、あんたの勝ちだよ、よかったな、ろくでもない人生に1つ勝ち星がついて、乾杯。

セブンスターライトに火をつけて、一服する。

以前から思っていたことだが、セブンスターのパッケージの星は全部でどのくらいなのだろうか。

かなりの数だというのはまあわかる。

人生でこれだけの数勝ち星を挙げれば、勝ち組と呼ばれる人になれる気がしないでもない。

勝ちの定義が人それぞれだとしてもだ。

最も印象に残っている過去の自分の勝利した姿を思い浮かべようとした。

全く出て来ない。

そもそも勝ち負けがつくような場所に出て行ったことなんてあったのかすら分らなかった。

戦場放棄。

平和主義者といえば聞こえはいいが、要するに争うのが面倒なだけのような気もした。

ふと気づくと、右手の人差し指と中指の間のタバコはフィルターだけしか残っていなかった。

灰は机の上に落ちていた。

生焼けよりはいいだろうと訳のわからないことが頭に浮かんだ。

こんなバカらしいことを考えてる間に、1つの目標に向かって努力をし、何かしらを掴もうと行動を起こす時期なのかもしれない。

ナッシング。ねえんだよやりたいことなんて。さようなら。バイバイ。

というような思考の繰り返しでここまで来たわけだが、繰り返すたびにさらにやる気が無くなっていくように思い起こしたくもないはずなのに、浮かんでくるというのは重症だ。

セブンスター。

パチンコでも打ちにいくべきかもしれない。

777。

僕が777と知り合ったのはチャットだった。

確か酒を飲んでバカ騒ぎをすることが部屋の主な目的だったと思う。

現実の出来事に心からうんざりさせられていた僕は、うわべだけの軽いノリの出会いを求めている。

その場所がネットだった。

まさか5年後の今日まで付き合いが続く何て思いもしなかったし、

777だつてそうに違いない。

何故777という呼び名なのか、というのは単に彼のハンドルネームがそうだったという話で特に深い寓意が込められているわけじゃない、と僕は思っている。

今更777の由来は何？というのも馬鹿馬鹿しいし、正直知りたいたとも思わないのだ。

ロックを聴いて酒飲んで何のことはない話で盛り上がっていた部屋の開催は、3年ほど前から回数が減り始め、今ではもう無くなつた。

残つたのは777との付き合いだけだつた。

777という呼び名、あだ名は、多幸症的な響きを多分に帯びているものの、彼の話題はかなりネガティブなものが多かった。

携帯が鳴る。

「よお聞いてくれよ。彼女と喧嘩しちゃつてさ」

「なんだおまえか。一体どうしたんだよ？ 何が原因だ？」

「いやさ、彼女との夜の営みの時に何かしらの変化が欲しかったんだよ俺は。もう3年ぐらいつきあつてゐるからな。だから、驚かせたいとおもつたんだよ。あれ、新鮮じゃない？ みたいな。それで考えてみたんだけど初っ端が大事なな。後のことは初めがよけりやスムーズに進むと思つたんだ。悟空みたくくかめはめ波とか叫んでみたかつたんだよ。そうなんだよ。俺はそうだつたんだよ。それであれこれ考えたあげく、実行したんだけどな。＜アクロバティックローリングアツタク＞って大声で叫んだんだよ。いや、正直な所、正確には覚えてないんだ。まあ、それに近いこと叫んだのは事実でさあこれからだと。彼女、俺が想像する以上に驚愕の表情だつたな。大成功！ と心で思いながら事に入ろうとしたら、それは俺の思い違いで彼女はドン引きしてたんだな。うん。引きまくりだつ

たよまったく。それで、無言のうちに家から出てったよ。あまりに引いてるもんで待つてくれとすら言えなかった。で、翌日電話したけど出ないんだよこれが。それから毎日電話してるけど、出てくれない。1週間も経ったのに。どうすりゃいいんだ俺は？」

「まったくパチンコのやりすぎで、頭のねじが緩んで飛んでたんじゃないのかおまえ？ そりゃー引くにきまつてんだろうが！ 何がアクロバティックローリングアッタク>だよ。アクロバティックなのは脳内だけでじゅうぶんだろ。必殺技なんてものはな、アニメとか漫画に任せとけばいいんだよ。どっかの喫茶店で、コーヒー入れる前に何かしら叫ぶマスターなんて見たことあるか？ コンビニの店員がレジ打つ前に奇声を発することなんてないだろ？ いちいち事に入る前に声を出す必要なんてないんだよ。心の中で言え。どうしてもいいなら」

「わかったよ。それはわかったから、仲直りする方法考えてくれよ。このままじゃマジで連絡つかないんだって」

「電話にでないんじゃないだろうもないだろー。あ、そういえばなんかの映画で『そんな昔の事は忘れたよ』って台詞があつたな。これ使えよ。そうだな、お前がそのまま彼女の家に行ったんじゃない前払いだろうから何か気を引くような格好をしていたらどうだ。例えば鉛筆を耳と鼻に突っ込んでいくとか。これは極端な例だけど、一週間も電話に出ないって相当だからな。とにかく常識を超えないと相手にしてもらえないって。」

それで、彼女は多分こう言う。『一体どうしたの？ おかしくなったの？ 何が原因でそうなっちゃったの？』って。そこでお前は言う。『そんな昔の事は忘れたよ』。これ連発してくアクロバティックローリングアッタク>もなかったことにしろ。どうだよ？」

「人事だと思って何なんだよ、お前。俺がそんなキザったらしい言葉吐けるわけやないだろうが！」

「ああ？ <アクロバティックローリングアタック>なんてほざいた奴にいわれたくねーんだよ、ボケが！」

今ではこんな話をするようになったが。

昔はそれはそれは暗い話を延々としたものだ。

彼の中から暗いものが消え去ってしまったのか、それとも表には出さないのか、それはわからない。

表面上は昔より幸せそうに見える。

僕らの関係は月日ともに軽い物ではなくなった。

5年、けて短い時間ではない。

未だに本名をお互い知らないというのもおかしい話だし。

ところで僕の名前は666。

別に深い意味なんてない。

「もしもし」

「ああ、お前かよ。どうした？うつるせえな何所いんだよ？」

「聞いてわかんないのか？パチンコだよパチンコ。ファイバーしちゃってさあー。幸せの御すそわけてとこだよ」

「はあそりゃよかったね。俺やったこと無いからわかんないけど、いくらぐらい勝ってんの？」

「77777円ぐらいだろやっぱり」

「何がやっぱりだよ。適当ぶっこいてんじゃねーよ」

「まあそれだけ勝ってるってこつたよ。つーかよ、聞けよお前。ちよつと前にどつかのおっさんから間違い電話だかなんだかがかかって来たんだけど、なってねえのよその態度が。普通、なにかしらの謝辞をいって切るもんじゃない？なのにそのおっさんたら無言でいきなりブチツと切りやがるわけよ。それで俺も腹立ってさ、てめえ謝るまで延々とリダイヤルしてやつからなとか燃えちゃって。まあ10回ぐらいでこつちが根負けして止めたんだけど」

「んーまあ言ってることは正しいとはおもうけど、10回ってやりすぎだよ。相手だってそんだけされたら謝る気なんてゼ口になる、つーか氷点下だね。逆にいやがらせしたくなるだろうよ」

「まあなやりすぎたってことは認めるよ。で、落ち着こうと煙草

吸おうとして口にくわえた時、ふと別のことが浮かんできたわけ。このセブンスターのパッケージの星は全部で一体いくつあんだよ？　ってキレそうになっちゃってさ。知ってるか？」

「煙草のパッケージに八つ当たりしてんなよ。でも、確かにいくつあるんだろうな、わかんないわ。あの、本気でうるさいから切るぞ。さらなる幸運を祈ってるよ。おこれよ今度」

携帯を切った瞬間にパソコンの電源を入れ、立ち上がりの遅さに苛立ちながら「早くしろ」と呟いてるのに気がついた。

何であいつは僕が適当に書いた内容を経験したように話したんだ？　ハッキング？

テキストを保存しているフォルダをクリックし、一通り見てみた。特に変わった所もないし、何か弄くられたというようなところもない。セキュリティソフトにも何者かがパソコンに侵入しようとしたという形跡は残っていない。

訳が分からない。

あいつがパソコンに詳しいなんて今まで聞いたこともない。実はその世界では名だたるハッカーだったりするのか？

家に不法侵入した？

いや、俺はもしかしていわゆる予知なんてものをやっちゃったのか？

可能性としては、家に勝手に上がりこんでパソコンを覗いたという方がまともだ。

が、そもそも僕がああいうものを書いているなんてこと知るのとは不可能だ。

誰にも言っていないんだから。

物を取ろうと侵入してきたと仮定しても、疲れたなちよいと一服しながらネットするか。なんていう馬鹿げた行動をするとも思えないし、いくらあいつが抜けてると言っても、穴の開いたバケツを片

手にこれ全然溜まんないな、なんていうほど底なしだとは思えない。実はそうなのかもしれないが。

大体、奴は家に来た事がないし、高価なものなんてそもそもありやしないのだ。

「予知」だと？　嘘だろ？

コンポからslipknotの「THE HERITIC AN THEM」が爆音で響きだし、比喻でも何でもなく椅子から転げ落ちた。

休日は寝すぎるので時間がもつたいたいとタイマーを掛けていたのを完全に忘れていた。

サビではこう叫んでいた。

「お前が555なら俺は666」

なるほどね。どうやら666は僕に対して555が反撃を開始したようだ。

昼寝をしていた鏡は勝喜からのメールで無理やり叩き起こされたようなものだった。

それはもう常時騒音を撒き散らしている壊れかけのラジオみたい
に高らかに着信を告げまくっていた。

その騒音の原因は勝喜で、思いついたことを片っ端から呼吸をす
るがごとく送り続けていたからだ。

鏡が我慢できずに携帯に向かい合った頃には、受信ボックスに7
7通ものメールが溜まっていた。

何なの？ 誰からよと見てみると全てが勝喜だった。

無視しようと思ったものの、これ以上、延々と送ってこられると
堪ったもんじゃない。

もしかしたら、事件とか事故とかに巻き込まれたのかもしれない。
77通と言うメール受信に驚きもしない鏡は、いわゆる天然と呼
ばれてもいいかもしれないかった。

内容はというと、とうとうあいつもおかしくなっちゃったのかな、
というようなものだった。

内容がどうかかそういう問題以前にメールを77通も送りつけて
くる馬鹿の相手をしてやる優しさを持ち合わせている鏡に賞賛を。
更に律儀にもそれを全部読んだと言うから恐れ入る。

メールは断片的で意味の分からない文章も多々あり、謎解きのよ
うな気分にはさせられた。

あいつ、クイズでも私に出そうとしてるのかしら？ ふと鏡は思
った。

鏡は細切れの文章を再構築して、何とか意味を持たせることに成
功した。

わざわざメモ帳を持ち出して文面を書き出し、どうにかこうにか
読めるようにしたわけだ。

二時間強の時間をかけてまでやるところを見ると、ただの暇人なのかもしれない。

要約すると、「666」悪魔「勝喜」は「555」ヒトラーのナチ党の党員番号「???」に狙われており、
「777」スロット大当たり「清二」と共謀している可能性すらある。

「444本」長島茂雄の通産ホームラン「333メートル」東京タワーの高さ「2月22日」猫の日「1月11日」犬の日「これも気になる。更にわけのわからない何者かが出現する可能性は捨てきれないとも。

この三桁のゾロ目に対する勝喜の決め付けは極めて恣意的だった。鏡はウィキペディアで調べてみた所、たった一つの意味だけに還元できるものじゃないことを突き止めた。

888、999の立場はどうなるそれに？

一体どうしっちゃったんだろう。自分が悪魔だなんて。そりや周りの人と同じじゃないやだという気持ちにはわかるけど、自分が悪魔だ！何て宣言する事は勝喜が想像するのと違う意味でびびっちゃう気がめっちゃするんだけど。

以前から変わってるとは思っていたけど、更に頭をシェイクされっちゃったのかな。

かわいそうに、とまで思った。

半年ほど前、町で偶然あったときはそんなに飛んでるなんて見えなかったのに。

5年程の付き合いで色々楽しい経験をしたこともあってきてっぱりとおかしいと断定することはさけたかった。

たまのメールもやり取りも「元気かー？」ってな感じで今日みたいに頭のおかしさをそこはかと醸し出していることなんて一度もなかったのに。これからもいい友達でいたかったのに。

なのに……。

鏡はメールにこう書いた。

「もう二度と送ってこないで。頭おかしいんじゃないの？ 清一まで悪者にして。あんたがなに考えようと勝手だけど、他人に迷惑を掛けるようなことはやめたら？ 最低。さようなら」

メルアドも変えよう。何だって私なのそれにしたって。送る相手間違ってる。

引くってことぐらいすぐわかるでしょうに。ばっかみたい。さーて、シャワーシャワー。

彼女にとってメールの量は問題にならなかったようだった。世界は広い。

勝喜は鏡からのメールを受け取った時にはすでにメールを送る情熱を失っていた。

目下の一大事、「5555??？」が一体誰なのかについて頭を悩ませていたのだ。

俺はヘマを犯したのかもしれない。

鏡だって可能性はあるのに自分の思いつきについて熱くなってメールを送りまくってしまった。

大概のアホだ。

俺は更に危険を推し進めたかもしれない。

まったくなんという不注意だ！ 目も当てられないとはこのことだくそつたれ！

あれ、そういやあいつ清一と面識なんてあったのか？

清一と鏡と俺で会ったことなんてあったけ？

思い出せない。

譫妄状態に勝喜は入り込んだようだった。

デジタル時計は4：44を表示したまま、挑戦的に清一に俺を見

ろ！と自己自身を提示しているように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844f/>

あいつは誰だ。俺はお前だ

2010年12月19日13時59分発行